シャーロット・パーキンズ・ギルマン

『黄色い壁紙』

（『黄色い壁紙』の音読会）用原稿

【音読①】

ジョンやわたしのようなごく普通の生活をしている人が、由緒あるお屋敷を一夏借りれるなんて、本当にすごいことだ。

植民地時代の館、先祖代々の大邸宅、わたしが付け加えるとしたら「幽霊屋敷」だろうか。もしそうだったら、ロマンティックでわくわくしてしまう。でも、これ以上の幸せを望んだら罰が当たるだろうな！

それでも、ここには何か奇妙な雰囲気が漂っていると、はっきり断言できる。

そうでなければ、どうしてこんなに安かったのか？どうしてこんなに長い間借り手がいなかったのか？

ジョンはわたしの心配を笑う。もちろん、結婚していれば夫に笑われるくらい、たいして珍しくもないが。

ジョンは極め付けの現実主義者だ。何かを信仰するということに我慢がならない人でましてや迷信などには強い嫌悪感を抱いている。触ったり、見たり、数字で表現したりできない物事についての話は、なんであれ、あからさまに鼻で笑う人なのだ。

ジョンは医者だ。そしてたぶん（もちろん、こんなこと誰にも言わないが、これは命のないただの紙切れだから安心して書くのだけど）それがたぶん、わたしの病気がよくならない理由のひとつだと思う。

なにしろ、彼はわたしが病気ではないと思っている！

だとしたら、どうしたらいいだろうか？

もし、自分の夫が社会的地位のある医者で、その人が友人や親戚たちに、一時的に神経が疲れただけだと、軽いヒステリーの傾向があるだけだと断言したなら。そういう立場に立たされた人間に何ができるだろう？

わたしの兄も評判のいい医者なのだが、彼も同じことを言う。

だから、リン酸塩だか、亜リン酸塩だか（どっちでもいいけど）を服用し強壮剤を飲まなければならない。それから旅行、それからいい空気を吸って、それから運動。そうして回復するまでは「働くこと」は厳禁とされている。

個人的には、あの人達の考えには反対だ。

わたしは、わくわくする気持ちになるような、気晴らしや刺激、性に合った仕事をする方が健康に役立つと思う。

しかし、どうしたらいい？

彼らが禁じているにも関わらず、こうして少しものを書いてみた。しかしとても疲れるのだ。隠れてこそこそ書かなければいけないし、もし見つかれば激しく反対されるのはわかりきっている。

時々想像してみる。わたしがこんな状態でも、もう少し反対されないで、もっと話し相手がいて、もっと刺激があれば。でもジョンは、わたしが自分の病気をくよくよ考えることくらい悪いことはないんだ、と言う。それで告白すると、そんなことを考えている自分に罪悪感さえ感じてしまう。

そんなことより、この家の話をしよう。

なんて美しいお屋敷！周りにほかの家はなく、道路からずっと奥まったところにある。村からは3マイルも離れていた。わたしが思い出すのは本の中で読むようなイギリスのお屋敷。生垣、石造りの塀、鍵のついた門、庭師や使用人達が使う小さな家もいくつかある。

そしてこの見事な庭！こんな庭を見るのは初めてだ。大きくて木陰もたくさんできている。植物で縁取られた小径がたくさんあり、ところどころに葡萄棚の東屋が並び、その下にはベンチが据えられている。

温室もいくつかあるが、今は全て壊れてしまっていた。

なにか法律上のいざこざがあったのだろう。相続人とか共同相続人だとかが絡むような。とにかくこの屋敷は何年も空き家になっていたのだ。

でも、そんなふうに考えると、せっかく幽霊屋敷だと見なして楽しんでいたのが台無しになりそうだ。まあ、気にしない。この家には奇妙な何かがある。わたしにはそう感じられる。

ある月夜の晩、ジョンにそのことを話してみたら、きみが感じたのは隙間風だよ、と言って窓を閉めただけだった。

わたしは時々わけもなくジョンに腹がたつ。こんなにいらいらすることはこれまでにはなかった。これも神経の症状のせいなのだろう。

ジョンは、そんなふうに苛立っていると、人間として当然持つべき自己抑制を失うことになるよ、と言う。だから努力して自分を抑えるのだ。少なくともジョンの前では。これがものすごくわたしを疲れさせる。

わたしはふたりの寝室がまったく好きになれない。わたしは下の階の、ベランダに出られる窓が薔薇に囲まれた、古風ですてきな更紗織のドレープが下がっている部屋を寝室にしたいと言ってみたのだが、ジョンはまったく耳を貸そうとしなかった。

あの部屋には窓がひとつだけだし、せまいからベッドがふたつも入らない。別室で休もうにも近くに部屋がないのだ、と。

ジョンはとても優しくわたしを気にかけてくれて、特別なことがないかぎり、わたしはピクリとも動かないで済むようにしてくれている。

わたしの一日は一時間単位でスケジュールが決まっていて、ジョンはわたしが疲れないようにしてくれるのだ。それをもっと感謝すべきなのに、そうできないわたしは卑しい恩知らずのように感じられる。

きみのためを思ってここを借りたんだよ、とジョンは言う。わたしは完璧な休養をとらなければいけないし、できるだけいい空気を吸わなければいけないのだ、と。

「運動するとなるときみの体力次第だし、食事はきみの食欲しだいだけど、空気はいつでもすえるんだからね」だから、わたしたちは最上階の育児部屋を寝室にしたのだ。

広くて風通しのいい部屋で、この階のほとんどを占めている。全ての方角に窓がついていて、空気も日光もたっぷりと入ってくる。最初は育児部屋、その後はお遊戯室、さらには子どもたちの運動部屋として使われていたに違いない。窓には子どもが落ちないように鉄格子がはめられ、壁には輪っかやらなんやらが埋め込まれているからだ。

ペンキも壁紙も、まるで男子校で使われていたかのようだ。ベッド付近は手の届く範囲で何箇所も、反対側の壁の下の方は一箇所大きく、壁紙が剥がされている。こんなにひどい部屋は今まで見たことがない。

のたくるように広がるそのけばけばしい壁紙の模様は、芸術上のありとあらゆる罪を犯しているようだ。

模様を追いかける目をまごつかせるほど、それはくすんでいるが、どんな模様なのかを見極めたいと感じさせながらも、強く気持ちを苛立たせる。不恰好で、不明瞭な曲線を辿っていくと、それは突然自殺してしまう。とんでもない角度で飛び出して　自ら壊れていくのだ。そのわけのわからなさは見たことも聞いたこともない。

色は不快で、ほとんど吐き気を催させる。燻ったような不潔な黄色で、ゆっくり動く太陽の光のせいなのか奇妙な色褪せ方をしている。一部はくすんでいるけれどけばけばしいオレンジ色で、あるところは気持ちの悪い硫黄のような色合いをしている。

子どもたちが嫌がったのも納得だ。わたしだってこの部屋にずっとくらすのは嫌だ。

ジョンが来た。これを隠さなくては。わたしに一言たりとも書かせたくない人だから。

【音読②】

月明かりの晩だった。まるで太陽の光が入り込んでくるように、月の光が部屋中に差し込んでいた。

ときどき、月の光が気持ち悪く感じることがある。すごくゆっくりと、這うようにして、次々と別の窓から忍び込んでくる。

ジョンは眠っていた。起こしたくなかったので、波打つ壁紙を月の光が照らすのをじっと見つめていたが、しまいにぞくぞくしてきた。

壁の後ろに見える微かな影が、表の模様を揺さぶっているように見えたのだ。まるで外に出たがっているように。

そっと起き上がり、壁紙が本当に動いているのか触って確かめにいった。ベットに戻ってくるとジョンが目覚めていた。

「どうしたの、お嬢ちゃん？」彼が言った。「そんなふうに歩き回っちゃだめじゃないか。風邪をひいてしまうよ」

話をするいい機会だと思って、わたしは本当はここに来てから良くはなっていないこと、ここから連れ出してほしいことを彼に伝えた。

「とんでもない」彼は言った。「あのね、ここはあと三週間で引き払うんだよ。その前にどうして出ていくって言うんだい」

「家の修繕も済んでいない。ぼくだって街での診療を中断して帰るわけにはいかないよ。もちろん、もしきみが危険な状態だと言うんなら話は別だよ。でもね、きみは本当に良くなっているんだ。きみ自身がわかるかわからないかは別としてね。ぼくは医者なんだよ。だからわかる。肉付きも良くなってきたし、顔色も良くなっている。食欲も出てきたし、前と比べてずっとぼくは安心しているんだ」

「体重は増えていないよ」わたしは答えた。「ここにきたばかりの頃よりも減っている。食欲も、あなたと一緒にいる晩にはまだいいかもしれないけど、あなたが出かけた朝にはまた食欲は落ちてしまう」

「このか弱き心臓に祝福あれ！」彼はわたしを抱きしめた。「きみが満足するまで好きなだけ病気にしておいてあげようじゃないか！でもね、時間を無駄にしないように今は素直に寝よう。続きは朝になってからだ。」

「出ていく話はこれで終わり？」わたしは憂鬱に言った。

「あのね、どうしてぼくがそんなことできるっていうんだい？たった三週間だよ。その後、ジェニーが家に戻る準備をしてくれるから、素敵な小旅行をしようじゃないか。間違いないよ、きみは良くなっているよ」

「体はね、でも」わたしはすぐに言葉を飲み込んだ。なぜなら彼がベッドの上にきちんと起き直り、厳しく責めるような目でわたしを睨んだからだ。わたしは何も言えなくなってしまった。

「ねえ奥さん、きみのためなのはもちろんだけど、ぼくのために、そしてぼくらの子どものためにも、お願いだから一瞬でもそんな馬鹿な考えを心の中にもぐりこませるようなことはやめてくれないか。きみのような気質にとって、それほど危険で、それほど誘惑的なことはないんだからね。それは間違った、愚かな空想なんだ。ぼくがそう言っているのに、医者としてのぼくが信じられないのか？」

もちろんわたしはそれ以上何も言わず、程なくしてわたしたちは眠りについた。彼はわたしが先に眠ったと思ったようだが、わたしは眠らなかった。あの表の模様と後ろの模様が一緒に動いているのか、それとも別々で動いているのか見定めるために、何時間も横になりながら目を凝らした。

日の光が当たっている時、この模様は連続性がなく、規則というものを完全に無視しているように見えた。正常な神経を、いつも逆撫でする。

その色はあきれるほど醜く、いい加減で、腹立たしい。あの模様を見ることは、まるで拷問のようだ。

目が模様をとらえた、と思っても先を辿りはじめた途端、後ろに宙返りして元に戻ってしまう。顔を平手打ちし、殴り倒し、踏みつけてくる。まるで悪夢だ。

表の模様はけばけばしいアラベスク模様で、何かキノコを思い起こさせる。もし、あなたが笠のある毒キノコを、果てしなく続く毒キノコの列を、芽をだしてどこまでも渦を巻くように急速に成長する毒キノコの列を想像できるなら、模様はちょうどそれに似ている。

そう、そう見える時もある。

この壁紙にはひとつはっきりした特徴がある。わたし以外、誰も気づいていないらしい。光の変化に伴って、この壁紙も変化するのだ。

太陽が東の窓から入ってくると（わたしは真っすぐ部屋の奥まで届くその光がいつも待ち遠しい）あっというまに変わってしまう。その速さはまったく信じられない。

だからわたしは常に監視している。

月の光の下では、（月の光は部屋を一晩中照らしている）まったく同じ壁紙だとは思えない。

黄昏時の薄明かりでも、蝋燭やランプの灯りでも、そして最悪なのが月の光なのだが、夜にはどんな光の中でも壁紙の模様は鉄格子へと変わる！これは表の模様のことで、こうなると、背後にいるあの女の姿がこれ以上ないというくらいはっきりと見えてくる。

うしろに現れるぼんやりとした模様が何なのか、わたしは長い間わからなかった。

しかし、今やそれが女の姿だと確信できる。

太陽の光の下では、彼女は押さえつけられ大人しくしている。彼女をそんなに鎮めているのは壁紙の力なのだろうか。わからない。その時間はわたしも静かになる。何時間も。

最近はずっと横になっている。ジョンはそれが体にいいのだ、できるだけ睡眠をとりなさい、と言う。

実際、ジョンは食事が終わるたびに一時間、わたしをベッドに寝かせることを習慣にし始めた。

これは間違いなくひどい習慣だ。なぜならわたしは眠ってなんかいないのだ。それに、この習慣はわたしの欺瞞を増幅させる。わたしはもちろん二人には本当のことを言わないからだ。そう、絶対に言わない。

正直に言うと、ジョンのことが少し怖くなってきている。

彼の様子がとても奇妙に見える時がある。ジェニーさえも不可解な表情を浮かべる。

ときどき、科学の仮説を閃くように、わたしははっと気づくことがあるが、それはこの壁紙のおかげかもしれない。

ジョンに隠れて彼の様子を見張っていたことがある。何気ないふりをして突然部屋に入ったりすると、なんと彼が壁紙をじっと見ているところを何度も見かけたのだ。ジェニーも同じだ。一度なんか彼女が壁紙に触れているところを見た。

彼女はわたしに気づいていなかった。だから、小さな、とても小さな声で、これ以上ないというくらい静かに、あなた壁紙に何をしているの？と聞いてみた。彼女はまるで盗みを見られたみたいに振り返って、どうしてそんな怖がらせるようなことをするのです、と怒った。

そして、壁紙に触るとなんでも汚れてしまう、黄色い染みがジョンの服にもわたしの服にも付いていたから、もっと注意してくださいね、と言ったのだ。

それは本当に何気ない言葉のように聞こえるだろう。しかし、わたしは彼女が模様を調べていたことを知っている。わたし以外の誰かが壁紙のことを知るような事態は防がなければならない。絶対に。

【音読③】

ばんざい！とうとう最後の日がきた。でも今日一日あれば十分だろう。ジョンは今晩ずっと街にいて、明日の夕方まで帰ってこない。

ジェニーは、今晩はわたしが一緒に寝ますよ、と言ってきた。ずるい女だ。わたしは、ひとりのほうが熟睡できるから、と言ってやった。

われながらうまいこと言ったものだ。なぜならわたしはひとりではないのだから。月の光が射し込んでくるとすぐに、あの気の毒な人が這いだして、模様を揺さぶり始める。わたしもすぐに起き上がり、彼女を手伝いに走った。

わたしが引っ張り彼女が揺さぶり、わたしが揺さぶり彼女が引っ張る。朝になる前にわたしたちは何ヤードも壁紙を剥がしていた。

わたしの身長くらいの高さまで、部屋の半分をぐるっと細長く。

太陽が登ってくると、そのひどい模様がわたしを嘲り始める。今日こそ終わらせてやるのだ。

わたしたちは明日ここを出ていくので、この部屋で使っていた家具をまた下の階に下ろして、元通りにしてもらう。

ジェニーは部屋を見て驚いていたけれど、わたしはこの醜いやつに心底腹が立ってやったのだと、彼女に言った。

彼女は笑いながら、わたくしが代わりにやりましょうか、あなたは疲れるようなことはしてはいけませんよ、と言った。

なんともまあ、彼女は本性を現したのだ！

でもわたしはここにいる。わたし以外の人間は、誰であろうと壁紙には触れさせない。生きているものは誰でも、だ。

ジェニーはわたしを部屋から出そうと努力していた。本当に見えすいている。わたしは彼女に言った。部屋がすごく静かでがらんとしてきれいになったから、もう一度横になってぐっすり眠れるだけ眠ろうと思う、と。だから目がさめるまで、夕食ができても起こさないでほしい、と。

だから彼女は部屋を出ていってもういない。使用人も。ものもなくなって、釘で打ち付けられた大きなベッドと、最初からその上に敷かれていたキャンバス地のマットレスだけが残された。

今晩、わたしたちは下の階の部屋で寝て、明日の船で帰ることになっている。

ふたたびがらんとしたこの部屋を、わたしは思う存分楽しんでいる。あの子どもたちは、よくもこれだけ傷つけたものだ。

ベッドだって散々齧られている！

でも、わたしは仕事にかからなければ。

わたしはドアに鍵をかけ、玄関先の小道に鍵を投げ捨てた。
外に出たくない。ジョンが帰ってくるまで、誰にも入ってきてほしくない。
彼を驚かせてやりたい。
ロープを一本持ってきている。あのジェニーも気づいていないだろう。もしあの女がでてきて、逃げようとしても、縛りつけてやる。
しかし、乗っかるものがないと高いところまで手が届かないのを忘れていた。
このベッドはちっとも動かない！
持ち上げたり押したりしてみたけど、全然力が入らない。すごく腹が立ったので、角を少し齧ってやった。でもわたしの歯が痛くなるだけだった。
そこで、床に立って自分の手が届く範囲の壁紙をすべて剥がしていくことにした。恐ろしくべったりとはりついていて、模様はそれを楽しんでやがる！あの絞め殺された首、膨らんだ眼、ぶよぶよ繋がる毒キノコ、すべてがいっせいに嘲りの叫び声をあげる。
怒りがどうしようもなく溢れ、何か突拍子もないことをしてしまいそうだ。窓から飛び出すなんて素晴らしいだろうな。でも、鉄格子が頑丈すぎて、やってみようとすら思えない。
それに、そんなことするつもりもない。もちろんだ。そんなのは見苦しいし、誤解されてしまうかもしれないのはよくわかっている。
窓から外を見るのさえ嫌だ。外にはものすごくたくさんの女たちが這っているから。女たちはすごいスピードで這い回る。
みんなあの壁紙から抜け出したのだろうか。わたしのように。
でも、わたしはうまく隠しておいたロープでしっかりと結えつけられている。だからあなたはわたしを外に連れ出すことはできない。
夜がきたら、あの壁紙の後ろに戻らなければならないなんて、冗談じゃない。
この広い部屋に出てきて好きなだけ這いまわれるのは、とても気分がいい。
でも部屋の外にはいきたくない。ジェニーがどんなにそうしてほしいと頼んできても、いくつもりはない。
なぜなら、外では地面を這わなければならないからだ。それに外では全てが黄色ではなく緑色なのだ。
ここでなら、なめらかな床を這い回ることができるし、わたしの肩は壁から壁へと伝うあの長いしみにちょうどぴったり当たるので、道に迷うこともない。
ああ、ジョンがドアの向こうにきた！
無駄よ、お兄さん、あなたにドアは開けられない！
彼は叫んだり、どんどん扉を叩いたりしている。
今度は斧を持ってこいと叫んでいる。
このきれいな扉を壊すなんてどうかしている！
「ジョン！」わたしはこれ以上ないほど優しい声で言った。

「鍵は玄関の階段のそばに落ちているんです。オオバコの葉の下に」
彼は少しの間黙っていた。
彼も今度はとても静かな声で言った。「ねえきみ、ここを開けてくれないか」
「開けられない」わたしは言った。「鍵は玄関の階段のそばに落ちているんです。オオバコの葉の下に」
おなじことを何度もゆっくりと、優しく言った。あまりにも何度も言うので、彼はあきらめて玄関にむかい、鍵を拾って帰ってきた。扉を開けて、彼は立ち止まった。
「なんだこれは！」彼は叫ぶ。「一体きみは何をやっているんだ！」
わたしはずっと這い回っていたが、肩越しに振り返って彼を見た。
「やっと外に出られたから」わたしは言った。
「あなたとジェーンに邪魔されたけど、壁紙はほとんど剥がしてしまった。これでもう、わたしを閉じ込めることは二度とできない」
どうしてあの男は気を失っているのだろう。動かなくなった。わたしが這う進路に横切るように倒れたものだから、わたしはそこを通るたびに彼の体を踏みつけて這わなければならなかった。

付記

このテキストは、東京都現代美術館での展覧会「あ、共感とかじゃなくて。」関連イベント「『黄色い壁紙』の音読会」（中島伽耶子）で使用するためのテキストです。小説の物語から、3箇所を抜粋しています。

この作品には多くの先行翻訳があり、その中でも特に以下の4つを参照しながら、声にだして読むことを想定し、独自のアレンジを行なっています。

石木利明「翻訳　シャーロット・パーキンズ・ギルマン 黄色い壁紙」『大妻女子大学紀要』文系第五四号、二〇二二年

豊島美子『女がうつる ヒステリー仕掛けの文学論』勁草書房、一九九三年

倉坂鬼一郎、南條竹則、西崎憲『淑やかな悪夢 英米女流怪談集』東京創元社、二〇〇〇年

鈴江璋子「黄色い壁紙／シャーロット・P・ギルマン」『みすず』35(7)(388) 一九九三年

アレンジした点として、翻訳によっては主人公のセリフに所謂「女言葉」といわれるような表現が使われることが多いので、自分の言葉として声にしてみる今回のイベントの趣旨から、主人公の語尾はジェンダーニュートラルな表現を目指しました。

ジョンのキャラクターや言葉遣いは、特に鈴江璋子さんの訳を多く参照させてもらいました。鈴江さんの描くジョンは、穏やかな中に無意識の差別意識が濃厚で、しかし真面目に良い人間であろうとする姿が私には感じられ、おすすめです。